

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 28 日現在

機関番号：34410

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02090

研究課題名(和文)1920-1950年代京都における公共空間の思想史的研究

研究課題名(英文)A Historical Study of Public Spaces in Kyoto From the 1920s to the 1950s

研究代表者

長妻 三佐雄(NAGATSUMA, Misao)

大阪商業大学・総合経営学部・教授

研究者番号：80399047

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 600,000円

研究成果の概要(和文)：1920年代から1950年前後にかけての京都における公共空間についての研究を行った。機械時代の到来は、メディアやコミュニケーションの手段を変え、人と人とのつながりも大きく変容せざるをえなくなる。このような変容を目の当たりにして、当時の京都の美学者や哲学者たちが「集団」や「共同性」の問題をどのように考えたのかを検討した。共同性の基礎になる感情移入論や対話の論理について検討した。同時代の京都の知識人の主要な著作や雑誌論文・対談なども分析対象として、そのなかで「集団」や「共同性」の論理を位置付けた。

研究成果の概要(英文)：This study explored public spaces in Kyoto from the 1920s through the 1950s. As advances in mechanization occurred, media tools and communication methods had to change, which has brought about a major transformation in connections among people. With this at the forefront, the study examined how aesthetics and philosophers considered the issue of "community."

研究分野：思想史

キーワード：公共空間 感情移入 京都学派

1. 研究開始当初の背景

1920年代以降、多元的国家論が登場するなど、中間集団の可能性が注目された。地域社会においても多様な中間集団を中心にした公共空間がもたらされる可能性があった。他方、機械時代の到来は、メディアやコミュニケーションの手段を変え、一元的な価値が強調される傾向に拍車をかけた。集団のあり方も大きな影響を受け、人と人とのつながりも大きく変容せざるをえなくなる。1920年代の多元的国家論や共同体論が前提にしていた社会集団の問題点、メディアや社会自体が孕む問題性、それに機械が与えた影響を歴史的・思想的に検討することを必要だと考え、研究を開始した。

2. 研究の目的

(1) 1920年代から1930年代にかけて、中井正一は「集団」の論理を構築しようとしていた。社会集団の内部においても、多種多様な意見が競合することで、さまざまな庶民の声の響きあい、対話する場としての集団が模索された。大衆の役割が注目されたにもかかわらず、自らの声を表現することができない数多くの庶民の声をどのように公共の場に届けるか、機械時代におけるメディアの発達をふまえた「集団」の論理形成を検討することを目的とした。

(2) 「集団」の論理を支える哲学として、1920年代に京都で活躍した哲学者や美学者の影響が考えられる。中井と大正期の多元的国家論の思想的な影響関係を調べるとともに、「感情」と「共同性」の問題を中心に深田康算の美学思想が中井に与えた影響についても検討することを目的とした。多様な意見の人びとが自由に話し合い、調整をはかりながら共存するためには対話の論理が必要になる。だが、対話といっても、論理的なさらに、戦前の哲学や思想が戦後の京都における公共空間に与えた影響についても検討することを目的とした。

3. 研究の方法

「近代日本における多元的国家論以降の「中間集団」の歴史の変遷」・「中井正一の集団と対話の論理」・「1920年代から1950年代の京都における言説空間」の三つの領域で研究を進める。『深田康算全集』や京都における美学・哲学関連の文献・資料を中心に本研究の基本的な資料を収集した。1920年代から1950年代にかけての言説空間を知るために、同時代の京都の知識人の主要な著作や雑誌論文・対談などを収集、分析した。そして、各テキストを時代背景と照らし合わせながら解釈した。

(1) 「多元的国家論から「中間集団」の歴史の変遷」

大正期の多元的国家論をはじめとする近代日本における「中間集団」について検討した。中井と同時代人でもあった三木清の共同性論や指導教官であった深田康算の感情移入論をはじめとする美学思想が、中井の「集団」論に与えた影響や、その思想的な相違について検討した。「感情移入」の問題は共同性を考察するときに重要である。参考文献・『深田康算全集』(玉川大学出版部、昭和48年)など。

(2) 「中井正一の集団と対話の論理」

中井関係の資料を収集して分析した。深田が急逝したあと、『深田康算全集』が編纂された。そこに集った深田の門下生を中心に雑誌『美・批評』が刊行された。そこで掲載された主要な論文に見る深田の影響、この雑誌の問題意識や美学思想と中井の「集団」論や「機械化」論の関係性について検討した。小田切進編『現代日本文芸総覧 補巻』(明治文献、昭和48年)に『美・批評』をはじめとする同時代の雑誌目次が掲載されている。その目次をもとに主要な論文を収集した。また、竹原書院図書館に中井関係の資料がいくつか所蔵されており、調査を行った。収集した資料を分析して、機械化の問題を当時の知識人たちがどのようにとらえていたのかを中心に分析した。参考文献・小田切進編『現代日本文芸総覧 補巻』(明治文献、昭和48年)など。

(3) 「1920年代から1950年代の京都における言説空間」

本研究では、同時代の思想的な文脈のなかで深田や中井のテキストを分析することを目的にしていたため、幅広く京都の知識人の思想を検討することに力点を置いた。京都学派の哲学者や知識人、田中美知太郎、上山春平や桑原武夫といった京都の知識人の書籍を中心に検討した。また、竹山道雄や鈴木成高、唐木順三等が参加した日本文化フォーラム主催の座談会やシンポジウムで、大衆文化の問題や機械化の問題がふれられており、これらも当時の思想的な課題を知るうえで参考にした。参考文献・日本文化フォーラム編『日本文化の伝統と変遷』(新潮社、1958年)、『田中美知太郎全集』(筑摩書房、1988年)など。

4. 研究成果

1920年代から1950年代にかけての京都における公共空間についての研究を行った。新しい技術の発達により、メディアやコミュニケーションの手段を変え、人と人とのつながりも大きく変容せざるをえなくなる。このような変容を目の当たりにして、当時の京都の美学者や哲学者たちが「集団」や「共同性」の問題をどのように考えたのかを検討した。共同性の基礎になる「感情移入」論について、深田康算や中井正一の言説を検

討した。人的なネットワークを明らかにするとともに、「感情移入」や「模倣」といった深田の美学思想の重要な概念が中井のなかでどのように受け継がれたのかを検討した。また、戦前と戦後の京都における哲学・思想的な連続性についても検討した。それとともに、同時代の京都の知識人の主要な著作や雑誌論文・対談なども分析対象として、そのなかで「集団」や「共同性」の論理を位置付けた。「地域の公共空間をめぐる二つの研究」という文章で研究の途中経過を報告したほか、学会研究会で研究成果の一端を発表した。

「地域の公共空間をめぐる二つの研究」は大阪商業大学比較地域研究所の所報に、本研究の途中経過を平成 28 年 12 月に報告したものである。深田の「感情移入」論やリップスの影響についても言及した。共同性を構築する根底には他者に対する「感情移入」をどのように考えるかが重要である。その意味では、深田のような美学者の議論が共同性の問題と関連している。また、公共空間を形成するとき、人びとが論理的に考え、異なる意見を尊重しながら、対話することが重要である。感情に訴えかける側面に一人ひとりが論理的に思考し、意見が異なる人に対しても「すじみち」をとおして語りかけることが重要になる。京都学派の哲学者や美学者のテキストは人びとの論理的な思考力を身につけ、公共空間で理性的に穏やかに議論する言語力を養うものであった。たとえば、梅棹忠夫は「ひとつの時代のおわり-今西錦司追悼」で次のように述べている。「今西の強靱な思索力は、ひとつにはその読書からくるものとおもわれる。わかいころ、西田幾多郎博士などの京都学派の哲学にふかく傾倒して、西田博士の著書を熟読して、文学部までその講義をききにかよったということである」(『梅棹忠夫著作集 第十六巻』1992 年、中央公論社、470 頁)というように、直接的ではないが、論理的な思考力や表現力を養ううえでも、京都学派の哲学は戦後の公共空間の形成に影響を及ぼしたのである。このような哲学や美学の文献が読まれなくなると、公共空間を支える人びとの論理的な思考力を養う機会が少なくなるといえるだろう。集団と対話の論理にとって、感情の果たす役割は決して小さくはないが、多様な意見を調整するうえでも論理力は不可欠である。この文章のなかで、深田を中心に、京都の知識人における論理の問題について論じた。

学会報告は平成 29 年度の社会芸術学会研究会で行ったものであり、ここでは中井の影響を受けた戦後の京都の知識人の言説を紹介した。とくに、鶴見俊輔の東井義雄を取り上げた議論を題材に報告した。以前にも鶴見の東井論を論じたことはあるが、今回は東井の思想を内面的に研究することで、かえって戦後京都の知識人の問題点を検討することとなった。本研究を進めるなかで、京都の知識人の言説だけではなく、たとえば鶴見らが批

判的に論じた東井のような人物の書物や資料を検証することも重要だと考えた。そして、東井の生活感情や実感に密着した表現や思考が地域社会の公共空間にとって果たした役割に注目した。『思想の科学』などで東井は「善意の哲学」や「実感主義」として批判されていた(鶴見俊輔他『戦後日本の思想』岩波現代文庫、2010 年、勁草書房版・1966 年)。「実感」に埋没して理論的に社会状況を考察していないという批判もあった。もちろん、いくつかの問題点もあるが、本研究のなかで、東井が手作りで刊行してきた文集などを通して目の前の生徒たち一人ひとりと向き合っている文章は「実感主義」という枠組みではとらえきれない。公共空間に子どもたちを中心に地域の人びとの声を届けており、それは人びとの「実感」に寄り添うものであった。「実感」と普遍的な価値を媒介することは困難かも知れないが、東井の営みを振り返りながら、地域における公共空間の可能性について検討した。

1920 年代から 1950 年代の京都における言説空間を調べているうちに、竹山道雄や唐木順三、下村寅太郎等が参加した日本文化フォーラム主催の座談会やシンポジウムが現代社会や大衆文化、機械化の問題を考へるときに重要であることを認識した。今後の課題として、より広い視野で京都における公共空間を検討する必要があるだろう。また、唐木順三編『思想の饗宴』(創文社、1968 年)で、唐木順三や下村寅太郎らが「型」について交わしている議論も今後の研究対象としたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

長妻 三佐雄

「地域の公共空間をめぐる二つの研究」

大阪商業大学比較地域研究所『Milepost』第 34 号、平成 28 年 12 月、5-8 頁

査読無

〔学会発表〕(計 1 件)

長妻 三佐雄

「地域文化の拠点として」

社会芸術学会研究会、平成 29 年 7 月 22 日

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

長妻 三佐雄 (Misao Nagatsuma)
大阪商業大学・総合経営学部・教授
研究者番号：80399047

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()